

鮭字考

高久由美

A Speculation on the Character “鮭 gui”

Yumi TAKAKU

はじめに

寒風吹きすさぶ中、天井からつりさげられた鹽引きサケは、新潟を代表する冬の味覚のひとつであろう。ところで、かつて鈴木牧之は新潟の風土を丹念に記述した『北越雪譜』の中で、サケについて記す冒頭に、

とまれかくまれ鮭の字を知りて俗用には鮭の字を用ふべし。件の如く鮭の字も古く用ひたれば、おほかたの和文章にも鮭の字を用ふべし、鮭の字は普くは通じ難し。こゝには姑く鮭に従ふ。

と言って、これ以降の文中では、一貫して鮭という字を用いる(図一)¹⁾。

一方、漢語の辭書の中には、鮭という字を引くと、字義に「フグ」とあるものがある²⁾。こ

れらの現象は日本語と漢語の中でそれぞれ独立した問題ではあるが、一體どういうことか體系的に解き明かすことができないかと思い調べ始めたのが本稿執筆の契機となった。中國と日本で、鮭という文字がどのように用いられてきたのか、日本語と漢語という、同一の文字體系を共有する二言語における文字の變遷を、サケという新潟を代表する物産を例として検証したい。

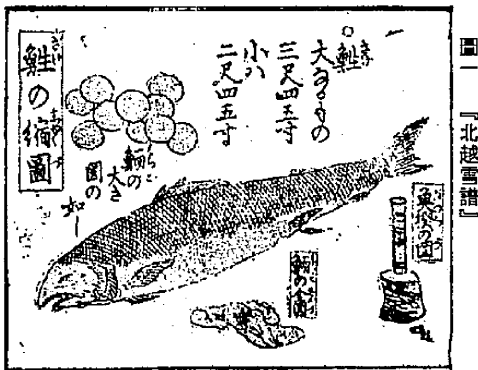
一 中國の古文獻に現れる「鮭」とその関連字 (1) 字書における鮭と鮭と鯉の出現時期

まず、中國の字書における鮭及びその関連字である、鮭、鯉の三字の出現状況を比較してみる。『説文解字』魚部(11 下)をみると、鮭字、鯉字は未収だが、鮭字は収められており、

鮭、魚臭也。從魚生聲(大徐：桑經切、小徐：息形反)

とあり、魚のなまぐさいこととされる。

次いで『玉篇』を閲するに、現存する原本玉篇殘卷では、魚部は僅かに 20 字が存するのみで³⁾、鮭、鮭、鯉 3 字いずれも存在せず、原本を用いて實證することができない。かつ、現在通行している『大廣益會玉篇』は唐宋の間に度々増補改訂されており、原本の姿を留めているとは言い難い。従って、原本玉篇に倣い、かなりその舊態を留めている『篆隸萬象名義』を検討



する必要がある。魚部を比較してみると、『大廣益會玉篇』の所収字 321 字に對して、『篆隸萬象名義』は 218 字、文字の配列はほぼ同じであるが、『大廣益會玉篇』において所収字が大幅に増補されたことがわかる。『篆隸萬象名義』魚部は所収字 218 字のうち、

No.91 鮭、桑丁反、魚貝。

No.202 鮭、古攜反、魚名。

とあり、『説文』にはなかった鮭字が新たに加わり、魚名とある。なお、鮭の字義が魚貝とあるが、『説文』等、他の字書との比較から、貝は臭字の誤寫である可能性が高い。これに對して、『大廣益會玉篇』魚部は全 321 字中、

No.89 鮭、先丁切、魚臭也。

No.90 鯉、同上。

と 2 字連続である。ここからやや離れた箇所に、

No.200 鮭、古迷切、魚名。

とあり、反切下字が攜と迷で異なるが、ともに齊韻に屬しており、字義も『篆隸萬象名義』と一致している。

以上から、字書においては、『説文』に鮭字が現れるのが最も古く、次いで原本『玉篇』（即ち『篆隸萬象名義』）において鮭字が加わり、更に唐宋以降、鯉が加わったものといえる。即ち、

	鮭	鮭	鯉
後漢『説文解字』	×	魚臭	×
六朝『玉篇』原	魚名	魚貝臭	×
唐宋『玉篇』増	魚名	魚臭	同鮭
唐・王仁昉『刊 謬補缺切韻』	鯉	胜、犬膏臭 也。亦作鮭	魚名

『説文』大徐本においても、鮭字下に徐鉉が今の俗字は鯉と作る、と注しており、これも唐宋以降、なまぐさいという意味で鯉字が用いられるような変化があったことを窺わせるものである⁴。なお、王韻における 3 字には、『玉篇』の傳承とは別系統の字解が付せられている。

(2) 字書以外の傳統文獻

字書以外で、傳統文獻における「鮭」字の用例は、『莊子』達生篇が最も古く、

桓公曰：然則有鬼乎？曰有。…東北方之下者。倍阿、鮭蠃躍之。

桓公が「それでは鬼はいるのだろうか」とたずねた。〔皇子告敖が〕答えていった。「い

ます。…〔家の〕東北の隅には、倍阿、鮭蠃〔という名の鬼が〕跳びはねている。」

とあるが、ここでは「鮭蠃」で家の中の東北の隅にいるという神名で、司馬注には

状如小兒、長一尺四寸、黑衣赤幘、大冠、帶劍持戟。

姿はこどものようで、背丈は一尺四寸、黑衣赤幘を身につけ、大冠をかぶり剣を帯び戟を手をしている。

という。『玉篇』にある「鮭、魚名」の鮭字とは、字音も字義も異なっている⁵。

鮭が魚名として出現する文獻としては、『山海經』北山荒經、『論衡』言毒篇があり、これらから、その生息地と習性を窺い知ることができる。

『山海經』北山荒經

北三百二十里曰敦薨之山…敦薨之水出焉而西流注于渤澤、出于昆侖之東北隅。實惟河原。其中多赤鮭。

さらに北に三百二十里を敦薨の山という。敦薨の川はここから出て西流して渤澤に注ぎ、昆侖山の東北隅に流れ出る。これがまさに黄河の水源である。その川の中には赤鮭が多い。

『論衡』言毒篇

在魚則爲鮭與鯀。故人食鮭肝而死。

〔毒が〕魚に在るのが鮭と鯀である。故に人は鮭肝を食べれば死ぬ。

さらに、『山海經』にいう赤鮭について、郭璞(276～324)は次のように注している。

今名鯀鮭爲鮭魚。音圭。

今、鯀鮭を名づけて鮭魚とする。音は圭である。

郭璞は、鮭魚は鯀鮭のことであるとしているが、鮭をフグと結び付けているのは、この『山海經』郭璞注にある鯀鮭という解釋が媒介となるためである。左思の吳都賦の中に記された鯀鮭という生物について、晉の劉逵は次のように注している⁶。

鯀鮭魚、状如科斗、大者尺餘。腹下白背上青黑、有黃文。性有毒。雖小獺及、大魚不敢食之。蒸煮食之肥美、豫章人珍之。

鯀鮭という魚は、姿がおたまじゃくしのようで、大きいものは 1 尺餘。腹は白く背は

青黒く、黄色い模様があって、生まれつき毒がある。小さいけれども猛で、大魚でもこれを食べようとしない。蒸し煮して食べると肥えていて美味である。豫章の人はこの魚を珍重する。

王充(27~101)も『論衡』の中で、鮭は肝に毒がある魚で、人がその肝を食すと死に至る、と鮭の特徴を記している。鮭をフグとするのは、こうした記述を綜合したものである。さらに、明の李時珍『本草綱目』に至っては、河豚の条に、圍入りでこの魚のことが記され(圍二)、河豚の別名として、

鯢鯢[一作鯢鯢]。鯢魚[一作鮭]。

噴魚。吹肚魚。氣包魚。

とある。ここに挙げられた河豚の別名のひとつ、鯢魚の鯢字と鮭字が異體字であるという。規と圭が同音であるため通用したのであろう。なお、鯢字と鮭字の二字の関係について、王念孫は鯢字は鮭字の俗體と言いい⁷、郝懿行は鯢字は鮭字の或體にすぎないと言いい、ともに正字は鮭であると述べている⁸。しかし、ここに至って鮭字は、河豚の別名「鯢魚」の異體字にすぎず、対象物との関係が希薄になり、『山海經』や『論衡』に見られるような具体的な描寫を伴っておらず、字義の判然としない文字になってしまったといえる。

(3) 宋元以降の字書

宋元以降の字書では、鮭、鮠、鯉の諸字を字音、字義の上で可能な限り細分している。『類篇』では(2)に挙げた文献資料等を総合して、鮭字に4種の字音があり、字義によって以下のように區別されている⁹。

鮭・反切	現代音	字義・出典
①涓哇切	Guī	魚名<『山海經』など
②戸佳切	Xié	吳人謂魚菜總稱<杜甫詩
③烏蛄切	wā	鮭蟹<『莊子』
④戸瓦切	Huà	楚冠名<『史記』裴駰集解

このうち、①、③の字音が比較的古い用例があるのに對し、②、④の字音はやや時代が下った資料に出現しているといえる。本稿で検討の対象としているのは①である。

また、『類篇』では、鮠字の字音も2種類あり、

鮠・反切	現代音	字義・出典
①留莖切	zhēng	魚名<出典不詳
②桑經切	xīng	魚臭<『説文』

とあり、鯉字は②と字音、字義が一致している¹⁰。

注目すべきは、宋代に初めて①音にある「鮠」は魚の名である」とする字義が出現したことで、このことから、あるいは日本でサケという魚名を表記する文字として鮠字を用いたのが、この時期に日本から中國に渡ったのではという推測も成立し得る。しかし、『類篇』と『集韻』以外には用例が無く、具体的にいかなる生物であるかを示す記載が他の中國の文献資料に全く残っていないため、これ以上検証することができない。また、これらに續く明代の字書『字彙』には、「鮠、魚臭也」とはあるが、「鮠、魚名也」とする字義は見出せない。このことから、日本からの鮠字の用法の逆流入という假説が成立する蓋然性はかなり低いといえよう。『康熙字典』には『集韻』を引いて留莖切の字音と「鮠、魚名也」とだけある。

以上、3群の資料を検討してきたが、結果的に、中國の文献資料からは、鮠=フグとする以外の考證は得られなかった。

二 日本の文献資料に現れる鮠および鮠字

日本におけるサケに関する記述は、古くは上代にまで遡る。以下では、字書及び本草書を整理の出発点とし、史書・地誌、物語、往來物の如く、文献資料の性格を分けて、鮠および鮠字の出現状況を検證することとする。

(1) 字書及び本草書

厳密に言えば、現存最古の日本撰述の字書として傳存するものは第一節で言及した『篆隸萬象名義』と言うべきであろうが、サケの和訓を載せる文献として、平安朝の寛平年間(889~897)から昌泰年間(898~900)に昌住に撰集された『新撰字鏡』から検討を開始したい。現存最古の完本である天治元年(1124)寫本には、
『新撰字鏡』天治本・卷九 魚部

鮠、生音。魚鼻也。勝也。

鯉、桑經反。魚鯉。

鮠、古推乃反¹¹、平。脯也。佐介。
とあり、鮠に佐介という和名をあてる。鮠

は抄寫生の筆誤で、本来鮭字とするつもりであったのだろう。さらに、魚部末尾には『小學篇』字として33字が付され、

劍、左介。

鮭、佐介。

左(佐)介という和訓のある文字が2字追加されているが、**鮭**は本文で既出なので重複である。『小學篇』字というのは、漢籍から採ったものではなく、日本で新たに追加された和製漢字とされるが、ごく少数漢用例に合致するものも含まれるという¹²。以上より、『新撰字鏡』天治本ではサケの表記としては**鮭**(=鮭)、劍が用いられ、鮭、鯉については魚がなまぐさい字義とある。なお、『新撰字鏡』の傳寫本で、天治本とは異なった原本からの抄録により成立したとされる享和三年本(1808)、群書類聚本がある。抄録本と稱されるこれらのテキストでは、傳寫を和訓のある文字に限ったために所収文字数が大幅に削減されたことから、上掲の天治本魚部と比較すると、所載の5字(實際は4字)のうち、和訓「佐介」、「左介」によったためであろう、鮭字と劍字の2字のみが収められ、鮭、鯉は未収である。抄録本の系統のテキストは、江戸中期以来諸學者の間に知られたことから、サケの表記として鮭字と劍字が定着する一因となったことが推測される¹³。

『新撰字鏡』の約三十年後、承平初年(931)のころに源順により成った『倭名類聚抄』は、完本が現存する、意味分類體の形式をとった日本語字書の濫觴である。源順は『倭名類聚抄』序に、漢字本来の意義を謬誤して我國の人が使用した例として、

或いは復た、俗人、その謬誤を知りて改易するあたわざる者あり。鮭、謬して鮭となり、檻、讀みて杉の如し、鍛冶の音、誤りて鍛冶に涉り、蝙蝠の名、偽りて蝙蝠を用いる等が是なり。

と述べ、まさに鮭と鮭がその一例として挙げられている。源順は鱗介部第三十龍魚部の鮭魚の条で、

鮭魚、崔禹食經云、鮭、其子似莓、赤光、一名年魚。春生年中死、故名之。

とさらに詳しく述べている。其の子すなわち魚卵が莓のようで、赤く光っているという説明は、

サケの特性と一致する。このように、『倭名類聚抄』は、『新撰字鏡』のサケ=鮭字説に對して、それは謬誤であるとし、サケ=鮭字とすべきことをつよく主張する。

平安朝の日本語文獻で、サケを鮭とするものには、『倭名類聚抄』のほか、延喜年間(901~922)に深根輔仁の撰によりなつた『本草和名』があり、十六卷蟲魚に、

鮭折背反、一名年魚春生而年中死故以名之、

一名鳧魚出崔禹、和名佐介。

と言ひ、鮭の和名が佐介とあるほか、年魚、鳧魚などの別名が挙げられ、そのうち鳧魚という別名は「崔禹に出づ」と注している。鳧は臭の俗字である。動植物名を網羅している點から、この場合、本草書も資料的には辭書と同格に扱うべきであろう。『倭名類聚抄』序によれば、『本草和名』は、『楊氏漢語抄』や『辨色立成』等とともに、編纂にあたって源順が参考とした書物のひとつであるという¹⁴。『本草和名』が『倭名類聚抄』と同じく鮭字を用いていることから、このことが實證されよう。

源順や深根輔仁らが「崔禹食經」「崔禹」として引用しているのは、唐の玄宗の開元年間(713~741)の中書舍人であつた崔禹錫が著した『食經』四巻のことであるが、早くに亡佚し現存していない。明代の李自珍『本草綱目』の引書二百七十六家目にも入っていないことから、比較的早い時期に亡われたと推測される。平安朝の日本語文獻で、サケを鮭と表記するものは、『倭名類聚抄』と『本草和名』の二書であるが、いずれの説もこの『食經』の記述が根據となっている。鮭と鮭をめぐる議論の出發點はこの文獻にあるといえる。

その後、江戸時代になると、平野必大が『本朝食鑑』(元禄8年:1695序)を著し、

鮭源順、年魚同上、鮭韓客、鰻俗名。(卷七鱗部)

として、サケを鮭と表記し、年魚、鮭、鰻という三つの異名を挙げる。このうち、鮭と年魚は、源順の名を挙げていることから『倭名類聚抄』に依據していることがわかる。韓客というのは、後述する朝鮮の本草書『東醫寶鑑』の説である。

寺島良安『和漢三才圖會』(正徳2年:1712自序)も、『倭名類聚抄』の記述に全面的に依據し



圖二

『本草綱目』

ており、

鮭、音は星。年魚、鱈と名を同じくす。鮭、俗に之を用ひるは誤りなり。鮭は河豚なり。

(卷四十)

として鮭字を正字としている(圖三)。「鮭は河豚なり」という補足説明は、『本草綱目』の記述に依るものであろう。この他、鱈や鮠などの同類の魚の解説でも、

鱈…其の肉、鮭より美なり。

鮠…頗る鮭に似る故、漢語抄に、水鮭、江鮭と名づく¹⁵。

などと鮭と比較しながら解説したものがある。このように、江戸時代の本草書や類書(意味分類體の形式をとった辞書)には、意識的に鮭と區別して鮭をサケの正字とするものが多いが、これは源順『倭名類聚抄』や深根輔仁『本草和名』の説を踏襲するものといえよう。

このように2種類の用字説が巷間に流布している事に對し、新井白石は享保二年(1717)に著した『東雅』の中で

鮭…サケの義不詳、或は東北夷地の方言に出しも知るべからず。世にはサケといふもの亦不詳といふなり。鮭は説文に魚臭と見え徐鉉は「今俗作鯉」といひ、鮭字の如きも二音ありて、音骸なるは魚菜也。音圭なるは河鮠別名と見えたりしが故なり。されど崔氏の説の如き、疑ふべくもあらぬ此物なり。

と率直に鮭、鮭二字について疑問を述べている¹⁶。

これに對し、積極的に鮭字が正字であることを主張するのは、江戸時代後期に成立した、狩谷掖齋『箋注倭名類聚抄』(文政10年・1827序)である。掖齋は前節に挙げた中國の文獻資料を多數引用し、それによって鮭はフグであると



圖三

『和漢三才圖會』

考證した上で、次のように述べている。

鮭魚…俗用鮭字非也。鮭音圭、鯉鮠魚一名也。…谷川氏曰「此魚肉易裂因名佐介」…按説文云「鮭、魚臭也」諸書皆同、無有爲魚名者。蓋佐介有一種鮭氣、與諸魚不同。故又名臭魚、出本草和名所引崔氏食經。是可知所以得鮭魚之名也。…東醫寶鑑松魚亦可以充之。

鮭魚、俗に鮭字を用いるのは誤りである。鮭の音は圭、フグの別名である。…谷川氏は「この魚は肉が裂けやすいからサケという」という。…『説文』には、「鮭は魚臭なり」とあり、諸書これと同じで、魚名であると言っている者はない。おそらくサケには一種の生臭さがあって、他の魚とは異なっているために、名づけて臭魚ともいうのだろう。『本草和名』に引用される崔氏の『食經』にある。このことから鮭魚という名の由來を知ることが出来る。…『東醫寶鑑』にてでくる松魚もサケに相当する。

鮭字ではなく鮭字を用いる根據として、サケには一種の生臭さがあるため、とする¹⁷。ここで和名サケの語源を説くために引用されている、谷川士清『和訓栞』も、掖齋と同じく積極的に鮭字が正字であることを主張する¹⁸。『和訓栞』さけの条の全文は、

鮭の字をよむは、倭名抄に食經を引けり。又俗用鮭字非也、といへり。或は年魚とも書せり。過臘魚なりといへり。朝鮮には鮭魚といふ。東醫寶鑑に委し。裂の義、その肉片々裂けやすしといへり。

とあり、サケを鮭と表記し、年魚、過臘魚、鮭魚の別名を挙げている。語源については魚肉が裂け易いからの推測を述べている。年魚は『倭名類聚抄』に依據するが、過臘魚、鮭魚は朝鮮語の魚名で、鮭魚は『本朝食鑑』にも見える。これらの名は、前出の新井白石の『東雅』に引用される、許浚『東醫寶鑑』(1611)という朝鮮の本草書に由來するものである¹⁹。該書には、松魚と鮭魚について、

松魚、性平味甘、無毒、味極珍、肉肥色赤而鮮明如松節、故名爲松魚。生東北江海中。鮭魚、性平無毒味亦甘美、卵如眞珠而微紅色。味尤美。生東北江海中。

とある²⁰。新井白石『東雅』にはさらに、

正徳の初(1711)、朝鮮の聘使來りて京に至りし時に、若水稲子その學士等にあひて、鮭魚の事を問ひしに、學士李重叔といふもの、まづ鮭魚を見て答ふるに、「其國の松魚なり」と云ひけり。…最後に南仲容といひしが答へしには「此魚我國松魚也。與鱈性同而體小、按我國東海所產、七八月間、自海作隊、遊上川溪、或磨身於石、鱗脫不止、至於自斃」といひけり。

とあり、同時代の本草學者、稻生若水(1655～1715)が正徳元年に朝鮮からの使者と、サケの名をめぐってやりとりした故事を記し、文獻と経験の両面からサケが朝鮮語では鱈魚、松魚とされたことを記している。また、『和訓栞』に言う過臘魚もこの時に出了た言葉である²¹。

一方、『和訓栞』がサケの語源は魚肉が裂け易いためとする以外に、サケの語源については諸説ある。江戸時代前期に安原貞室が慶安3年(1650)に著した『片言』に

此魚、子を生まんとて、腹のさけはべる、とやらむと云へり。

という記述が見える。また、江戸時代後期、大石千引が文政13年(1830)に完成させた『言元梯』には、

鮭^ニ、朱^ニ、肉色也。和名抄序に鮭譌爲鮭、榻讀如杉、鍛冶之音誤涉鍛治云々、然れども字鏡に鮭云々御史に榻、鍛冶の訓あれば誤にはあらず。

という、肉の色から、サケはアケ(朱)の轉とする説がある²²。『片言』は語源を説きながら表記には鮭字を用いているし、『言元梯』は表記に鮭字を用いるのは誤りではないと言っている。このことは、鮭字が広く一般に用いられていたことを示していると言えよう。

また、『下學集』には、多様な寫本、版本があることが知られているが²³、室町時代の寫本とされる、天文二十三年本(1554)、永祿二年本(1559)、黒川本(室町極末期)いずれのテキストも、『新撰字鏡』と同じく、鮭字を用いて、

鮭 (天文二十三年本) 鮭 (永祿二年本)
鮭 (黒川本)

の如くある。なお、室町時代のサケの表記については、併せて(5)表1も参照されたい。

以上から、上代以降の字書及び本草書では、『新撰字鏡』に始まり『下學集』へと續く鮭字を用いた表記と、『倭名類聚抄』と『本草和名』に始まり、それを繼承した寺島良安、谷川士清や狩谷棊齋らによる鮭字を用いた表記が並行していることがわかる。

(2) 物語

サケのことが描寫される物語資料としては、平安期まで遡ることができ、『今昔物語』の中には、越前の守爲盛が官人に供すために準備したご馳走のひとつに鹽引きのサケが並ぶ「越前守爲盛、付六衛府官人語」の一話がある。また鎌倉初期、『宇治拾遺物語』の中は、盗んだサケをめぐる大童子と綱丁のやりとりが描寫される説話「大童子鮭ぬすみたる事」と聖寶僧正が身分の高い僧官との賭けによって、眞裸に褌で干サケを太刀に見立てて佩帶する説話「聖寶僧正渡一条大路事」の二話がある。

このうち、『宇治拾遺物語』の萬治二年(1659)版本を見ると、鮭字の結體は、

鮭 鮭 鮭

の如く、どれも鮭字の筆寫體であって、鮭字に作る例は見えない²⁴。さらに網羅的に調査する必要もあろうが、物語作品の中のサケは、鮭字を用いて表記されるのが一般的であったといえよう。

(3) 史書・地誌

『常陸國風土記』の冒頭には「常陸國司解申古老相傳舊聞事」とあり、靈龜元年(715)の郷里制施行以前の狀態を示すことから、和銅6年(713)の

其の郡内に生ずる銀銅彩色艸木禽獸魚蟲等の物は具に色目を録し、及び土地の沃埴山川原野の名號の所由、又古老相傳の舊聞事を史籍に載せて言上せよ

という風土記撰進の官命の直後に上申されたらしいとされるので²⁵、ここにでてくるサケの記述が、日本における最も古い例と言える。久慈郡助川の地名の所由を次のように記している²⁶。

自此良卅里助川釋家。昔號遇鹿…至國宰久米大夫之時、爲河取鮭、改名助川。俗語謂

鮭胆爲須介。

ここより、艮〔=丑寅、北東〕の方角に三十里いくと、助川の禪家である。昔は遇鹿と呼ばれた。國幸の久米大夫の時に、河で鮭が取れることから、地名を改めて助川とした。俗語では、鮭の胆のことを須介〔スケ〕とする。

『延喜式』(延長5年:927撰進)には、朝廷の儀式の供物や諸國からの寄進品、また租庸調の物納品として、他の産物と並んでスケが頻繁に登場する。例えば、

散祭料…米。糯米各一斗五升。大豆。小豆各五升。鮓。堅魚。平魚。各六斤。鮭二隻。海藻六斤…。(卷一 神祇一 四時祭式上) 凡左右京。五畿内國調…熬海鼠八斤九兩。棘甲羸²。甲羸各六斗。鮭廿隻。雜魚腊廿六斤…。(卷二十四 主計式上)

諸國貢進御贄。…年料…信濃國楚割鮭。陸奥國。若狹國生鮭三擔十三隻三度。越前國生鮭三擔十三隻三度。能登國。越中國。越後國楚割鮭八籠八十隻。鮭兒。氷頭。背腸各四麻笥。佐渡國。丹波國生鮭三擔六隻三度。丹後國生鮭三擔十二隻三度。氷頭一壺。背腸一壺。但馬國生鮭三擔十二隻三度。因幡國生鮭三擔十二隻三度。…備前國氷頭十缶二度…。(卷三十九 内膳式)

ただ、「鮭」とだけあるのではなく、「干鮭」「楚割鮭」「鮭鮓」など様々な加工されているのがわかるし、「内子鮭」「背腸」「氷頭」などといった、部位別の名称も頻見する。現存する寫本の中では、

鮭 鮭 鮭

など、鮭字の筆寫體が用いられている²⁷。

『常陸國風土記』、『延喜式』という、奈良平安朝の資料において、鮭字と鮭字が用いられていることは、(1)字書において、『新撰字鏡』と『倭名類聚抄』という基本資料における鮭字と鮭字を用いた表記とパラレルな現象といえる。

(4) その他

往來物と稱される書簡形式をとった文獻資料は、徳川時代に寺子屋の教科書となって庶民教育に用いられた。往來物は教科書的な性格と辭書的な性格との兩方を兼ね備えており、その

E	D	C	B	A	
夷鮭	夷鮭	夷鮭	夷鮭	夷鮭	四月狀返 夷鮭
鮭鹽引	鮭鹽引	鮭鹽引	鮭鹽引	鮭鹽引	五月狀返 鮭鹽引

表一『庭訓往來』各テキストにおける

スケ表記の字形表

代表が南北朝時代の玄慧法師作とされる『庭訓往來』であり、室町時代からの寫本が多数存在する。一月から十二月まで毎月一度往來した、各十二通の往復書簡中、四月の返信状には諸國の名産品を記す中に、

越後鹽引、隱岐鮓、周防鮓…松浦鮓、夷鮭…とエゾのスケが挙げられ、五月の返信状には調理品の名を列挙する中に、

鮓白干、鱈楚割、鮭鹽引、鰯鮓、鮓鹽漬…。スケのシオビキとある。『庭訓往來』には、膨大な数の古寫本、刊本があることが知られているが、表一「庭訓往來各テキストにおけるスケ表記の字形表」は、室町時代から江戸時代までの5種の寫本・刊本に依って、鮭字を一覧にしたものである。Aは、經覺が室町時代中期(1473以前)に書いたとされる『庭訓往來』寫本、Bは天正7年(1579)建部賢文筆『庭訓往來』の寛永18年(1641)刊本、Cは刊行者不明の『庭訓往來』寛永5年(1628)刊本、Dは『庭訓往來註』の最古の傳本の寫本で、室町時代末期の書とされる。Eは『庭訓往來抄』寛永8年(1631)刊本である²⁸。表の字形からわかるように、『庭訓往來』、『庭訓往來註』の各テキストでは、草書體に近いくずし方をしているBやC、楷書體のDやEなど、書體は様々であるが、字形を比較すると、いずれも鮭字が用いられていることがわかる。また、Eの『庭訓往來註』には、鮭字に注して、「唐の鮭は別なり」と記し、わざわざ漢語の鮭は別生物であることを注記している。

また、『庭訓往來』には、内容的に藤原明衡(989-1066)の『新猿樂記』を吸収するところが

あるという指摘がある²⁹。実際、『新猿樂記』の「四郎君、受領郎等」において諸國の名産品として「越後の鮭又漆」と記される箇所がある。『新猿樂記』の萬延元年(1860)寫本を見ると、この箇所でも鮭字を用いていることが確認でき、表記の用字は『庭訓往來』と同じ鮭字であることがわかる³⁰。

以上、資料を4群に分けて検討した結果は、次のように總括できよう。鮭字を用いた表記と鮭字を用いた表記は『新撰字鏡』『倭名類聚抄』という、上代を代表する字書からすでに並行して現れていた。『倭名類聚抄』は鮭字に対して鮭字が正字であることを主張し、これが江戸時代の本草書や一部の辞書等に踏襲された。辞書以外の一般書については、『常陸國風土記』、『延喜式』という、奈良平安朝の資料では鮭字と鮭字が並行して現れる例もあるが、物語や往來物といった室町時代以降の資料では表記に用いられていたのは主として鮭字だったようである。

三 近現代の中國、日本における salmon を表記する文字について

以下では、視点を變えて、近現代の日中兩國における salmon の譯語を基點として、問題の整理を試みた。16世紀末以降、キリスト教の普及が東アジアへと広がるにつれ、英國人宣教師がキリスト教布教のために中國語を習得することを目的として、いくつかの英漢字典が編まれるようになった。これまでは、中國と日本の文獻資料で、それぞれに鮭と鮭と鯉の出現状況や用例を検證してきたが、以下では、これまで別箇に検討してきた事例をつき合わせるために、19世紀以降の中國で、salmon という言葉が何という漢語に譯されているか、いくつかの辭典を照らし合わせて検證してみることとする(表二「近現代の日中兩國における salmon の譯語」)。

①モリソン(Robert Morrison;馬禮遜)の『華英字典』(A Dictionary of the Chinese Language)は、全3部のうち、第1部が部首引きの『字典』(1815年)、第2部が音引きの『五車韻譜』(1819-20年)、第3部が『英漢辭典』(1822-23年)、という大部の辭書である。

モリソン 1822	SALMON, 鰭鮭魚, <i>ma yam ya</i> .
ロブシャイド 1866-69	Salmon, n. <i>Salmo</i> , 狗吐魚; <i>osmerus</i> (?), 錦鱈; smoked salmon, 烟狗吐魚; salmon fish, 馬友(?), 馬母(?); salmon-leap, 魚梁.
岩川 1884	Salmon, 鮭, 出云
黃 1928	salmon (sām'yn), [名] 鮭. 鮭色, 赭色.

表二

近現代の日中兩國における salmon の譯語

19世紀の中國で編まれた初の本格的な辭書とされ、中國語近代語彙研究において出發點となる資料である。そして、②ロブシャイド(Wilhelm Lobschied;羅布存德)の『英華字典』(English and Chinese Dictionary)は19世紀に數多く編まれた英漢辭典の一つの到達點として、高く評価されている³¹。これらの辭典では、salmonに對して、モリソンは「鰭鮭魚」、ロブシャイドは「狗吐魚」「錦鱈」「馬友」「馬母」とあり、「鰭鮭魚」と「馬友」は同一來源の可能性はあるが、明らかに一定の譯語が定まっておらず、「鮭」「鯉」は言うに及ばず、「鮭」は用いられていない³²。あるいは方言的な要因が、彼らの採集した中國語の語彙に影響を與えているのかもしれない³³。時を同じくして、明治大正期の日本で數多く刊行された『哲學字彙』(井上哲次郎編、1881年)の如き専門用語の英語對譯語彙集は、當時の中國語に借用され近代中國語の語彙形成に大きな影響を與えたが³⁴、このうち、明治初期1884年に岩川友太郎によって集英堂より刊行された③『生物學語彙』(Biological Vocabulary in English, Latin and Japanese)を見てみると、アルファベット順に配列された動植物名の、salmonの項には、「鮭」と「佐介」の二語を以てする。④黃士復・江鉄主編の『綜合英漢大辭典』は1928年に初版が刊行された、中國人によりなる英漢辭典であるが、ここでは、岩川語彙と同じく、salmonの對譯は、「鮭」とそこから派生する色彩名稱「鮭色、赭色」を充てる。所謂サーモンピンクであろう。これ以降、中國の辭書類では、「鮭」がsalmonの用字として定着して現代に至っている³⁵。

なお、日本では、明治から昭和初年にかけての辭書では、『日本百科大辭典』、『大言海』は見

出し字に「鮭・鮭」二字を併記しているが、『日本百科大辞典』の記載内容には「鮭のグリル」「鹽鮭」など、専ら鮭字が用いられており、これが實生活の反映であったのだらうと推測される³⁶。前出の『生物學語彙』にも、譯語として鮭、佐介の2語が配されている。鮭ではなく鮭字が用いられており、明治以降は鮭字が一般化したというべきであることがわかる。鮭を本字として使用する習慣は、江戸時代の字書および本草関係の書物で途絶えたといつてよい。

以上、中國の英漢辭典と日本の英和辭典における salmon の對譯語を追うことによって、現在日中兩國で定着している「鮭」は、近代における日本から中國への用字の借用であるとの確信を得た。

おわりに

事物の名前、ことに動植物の名がそうであるが、實際のモノと名前の結びつきが、同じ漢字を共有する日本と中國で別のものを指すことが往々にしてある。事物異名と同文異解という語を用いれば、「鮭」がフグとサケを表すのは、同文異解の一例といえよう。

中國で20世紀に至って、サケが鮭となった、即ち鮭字を用いてサケを表すようになったことについての、一つの假説を提示したい。中國におけるサケの主たる生息地は、黒龍江およびウスリー河流域一帯で、當地を溯上するサケは中國語で「大马哈魚」と稱され、黒龍江省を代表する名産品のひとつとして大いに珍重されているが³⁷、そもそも「鮭」が用いられるようになった20世紀初めというのは、日清戦争後、日本人が大量に中國東北地方に流入するようになった時期である。彼の地の名産品であるサケを、日本人は鮭字を以て表記したであろうことは、想像に難くない。こうしたことがきっかけとなって鮭字を用いるのが定着していったとは考えられないだろうか。換言すれば、漢字という共通の文字體系を有する日本と中國の間で、用字つまり文字の使い方について、日本から中國への借用がおこった一例であり、言語接触における語彙借用 loan word に類する現象といえよう。

また、そもそも上古の日本語でサケを鮭とし

たのはなぜかという問題が依然として残る。これはあくまで假説にすぎないが、『山海經』にある赤鮭の語と、サケの魚肉の赤色であることからの連想によって、赤鮭の鮭字を、日本でのサケ（佐介）の漢字に當てたとは考えられないかということを書いて、本稿の締め括りとしたい。

注

- 鈴木牧之『北越雪譜』初編下之卷・鮭の字の考、天保7年(1836)。
- 『大漢和辭典』第12巻、743頁。
- 『原本玉篇殘卷』119頁、中華書局、1985年。
- 他に、音符の生と星が通用された例として肉部(4下)の胙と脰を擧げることができる。各字の説解には「胙、犬膏臭也」(なまぐさい)、「脰、星見食豕也」(豚肉の中についた小さく星のようなつき肉)とあるが、經典では「胙胙」「胙肉」字に「脰」を通用しているため、胙字は廢れ、脰の本義も廢れた、と云う(段玉裁『説文解字注』4下肉部・胙字)。鮭の俗字として鯉を用いるようになったのは、胙と脰の通用からの類推かもしれない。
- 陸徳明『經典釋文』所引。字音は「鮭本作蛙、戸鳩反」とある。
- 『六臣註文選』巻5、6頁。
- 『廣雅疏證』巻10下、18頁。
- 『山海經箋疏』巻3、6頁。
- 『類篇』11下、17頁。
- 『類篇』11下、20頁。なお、『龍龕手鏡』は、鮭を俗、鯉を正としている(巻1・第34魚部)。
- 鮭字の反切は古推乃反とあるが、推乃2字は携(=攜)を誤って分書したものであろう。反切は古攜反とすべきで、『篆隸萬象名義』と一致している。
- 貞荊伊徳「日本の字典」『新撰字鏡の研究』汲古書院、1998年所収。なお、ここでサケとして追加された劒字は、まさにその稀少な一例で、『字彙』魚部に「劒、吉屑切。音結。割治魚肉也」とあり、「魚肉をサク」という字義と和名「佐介(裂け)」とが丁度合致するようだが、偶然か否かはあくまで推測の域を出ない。
- 天治本と享和三年本等の抄録本の関係については、川瀬一馬『古辭書の研究』59頁、雄松堂出版、1955年、及び貞荊伊徳「新撰字鏡」抄録本の異本としての一面(『新撰字鏡の研

- 究』汲古書院、1998年所収)において詳細に論じられている。
- 14 川瀬一馬注 13 前掲書、87 頁。
- 15 ここで寺島良安が『漢語抄』として引用しているは、『倭名類聚抄』鮭字の条で引用される『楊氏漢語抄』からの孫引きである。現存する一條兼良(1402~1481)撰述『桑家漢語抄』第10巻魚部所収5字とは一致しない(『版本和訓栞後編下』古辞書影印資料叢刊第7巻巻末附載、大空社複製、1998年)。
- 16 新井白石『東雅』第19巻、鱗介。
- 17 その後、鈴木牧之が「字彙には鮭は鯉の本字にて魚臭といふ字なりといへり。鮭の鮮鱗はことさらに魚臭きものゆゑにやあらん」(『北越雪譜』巻之下、鮭の字の考へ)という、校齋と略同じ内容の字説を述べている。
- 18 谷川士清『和訓栞』は、著者の死の翌年、安永6年(1777)に前編の刊行が始まってから明治20年(1887)の後編の最終刊行まで、全書の刊行に百十年の歳月を要したが、このうち、「さけ」を収める前編第10巻サ行の巻は、先ず1777年に刊行されているので、1827年成立の狩谷校齋『箋注倭名類聚抄』中でも「谷川氏曰」として引用がある。
- 19 彼國『東醫寶鑑』には「鮭魚味亦甘美、卵如眞球而微紅色、味尤美、生於東北江海中」とみえたり。其説の如きは、彼國の方言に出て…「卵如眞球而微紅色」といふ事は、他魚のなき所にして、崔氏の「其子如莓」といふ説に相合へり。
- 20 『東醫寶鑑』湯液篇巻之二、魚部。
- 21 稻生若水と韓使のサケをめぐる問答は、東條琴台『先哲叢談續編』巻之四、1883年、にも収録されている。なお、韓使の返答に對して、新井白石はさらに「仲容が答へし所といへども、鮭魚松魚の事共よく知りぬるものとは見え」と記し、稻生若水は「明に是れ鮭と松魚と一物なり。然れども名つけて松魚と爲すは、亦自ら東韓の方言にして、華人の稱する所の者にあらざるなり」と言い、あくまで朝鮮語と日本語の問題としており、漢語については言及していない。
- 22 23 頁。辞書以外も、鈴木牧之が「〔サケの幼魚が〕形ち糸の如く、たけ一二寸、腹裂て腸をなさず、ゆゑに佐介の名ありといひ傳ふ。…海に入りてのち裂たる腹合して腸をなすと漁夫がいへり」(『北越雪譜』巻之下、鮭の始終)や、後述『常陸風土記』の「俗語では、鮭の胆のことを須介〔スケ〕とする」のように、和語サケの語源を推測した諸説がある。
- 23 川瀬一馬注 13 前掲書、576 頁。
- 24 「大童子鮭ぬすみたる事」巻一・二十頁。「聖寶僧正渡一条大路事」巻十二・十頁。
- 25 岡井慎吾『日本漢字學史』明治書院、1934年、53 頁(再版、1989年、有明書房)。
- 26 二十七頁ウ。
- 27 本稿の文字は土御門本(元和3~4年、土御門泰重が一條家所蔵本を書寫)から採ったものである(『國立歷史民族博物館藏貴重典籍叢書歷史篇』所収、第12巻~第18巻、臨川書店、2000)。
- 28 いずれも、石川松太郎監修『往來物大系』所収、第7巻・第8巻、大空社複製、1992。
- 29 岡井慎吾注 25 前掲書、190 頁。
- 30 國會圖書館藏萬延元年(1860)寫本による。
- 31 各辞書についての個別的な研究は、沈國威『近代日中語彙交流史』第4章(笠間書院、1994年)に詳しい。
- 32 モリソンの『字典』(1815年)魚部には、「鮭、The smell of fish. Read Tsang, The name of fish」(Part 1, Vol.3, p799)とあるが、これは『類篇』や『集韻』の記述を踏襲したものといえる。
- 33 現代中國語では、學名など、正式な表記には専ら鮭とするが、他に「大马哈鱼」「哲罗鱼」「细鳞鱼」「三文鱼」などの、数々の異名がある。日本においても、「シャケ」「ショービキ」「サケノイウオ」「エオ」「アギアンズ」「ハナマガリ」など、實に様々な方言があることからこのことが推測されるだろう(『現代日本語方言大辞典』2107 頁、明治書院、1992年)。
- 34 近代中國における日本語借用語の問題については、沈國威注 31 前掲書、第2章および第4章の中で体系的に論じられているので、そちらを参照されたい。
- 35 『中國大百科全書』生物學 I、470 頁、中國大百科全書出版社、1991 年。
- 36 『日本百科大辞典』第4巻、793 頁。『大言海』792 頁。
- 37 中华特产网>中华特产博览城>特产鉴赏馆>地方特产
http://www.csn.com.cn:8080/tcjsg2_1.jsp?id=846